だから職員が辞めていく
ダメな施設を選ばないために 16

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2014-09-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 岡田, 耕一郎, 岡田, 浩子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/228

だから職員が辞めていく

ダメな施設を選ばないために

16

チェックポイント⑮

「環境を使ったケア」

新しい介護のひとつとして、「環境を使ったケア」というものがある。流行っているような、流行っていないような微妙なケアだが、今回は就職先として老人ホームを選ぶ際のチェックポイントとして、「環境を使ったケア」を取り上げてみることにしよう。

「環境を使ったケア」という言葉は、あまりなじみがないかもしれないが、たとえばこんな説明をされることがある。

――「生活のにおい」に着目し、家庭的な雰囲気を出すように、各ユニットで生活感のある環境を作っています。年期の入った茶箪笥を置いたり、ユニットごとにご飯を炊き、そのご飯を見慣れた家族との団欒という思い出の詰まった自分の茶碗と箸で食べたり、それぞれの部屋に、使い慣れた家具や小物を持ち込んでもらうことで、それまで住んでいた家の雰囲気を醸し出そうというわけです。

すると、入居する前は身の回りのことがほとんど出来なかったのに、みんなのためにご飯をよそったり、自分で服をたたんで衣装箪笥にしまったりと、何らかのきっかけで失ってしまった役割や生活行為が、再び呼び起こされ、過去に何十年と行ってきた生活行為が自然に引き出されたケースがあります。家庭的雰囲気を作り出すということは、単なる家庭的な雰囲気作りをしているのではなく、過去の経験を生かした自立的行為が呼び覚ませることを意図して行っているものです――と。

この新しい介護手法は、

「家庭的」な介護の押し売り

利用者の過去の生活に近い環境を作り、老人ホームの環境と利用者の生活習慣を適合させて、利用者の自立的な行動を引き出そうとするものだ。

老人ホームの環境と利用者の生活習慣を適合させるという発想自体、特に問題はない。

確かに、利用者の生活習慣も人それぞれ、これまで生きてきた人生も人それぞれである。

人生いろいろ 暮らしもいろいろ

女性の利用者であるAさんは、当時としては珍しい高等な女子教育を受け、女学校の教師をしていたハイカラさんだ。気に入らないところがあると、すぐに老人ホームを転々とかわるようなタイプだった。彼女は、老人ホームのまずい食事が気に入らない。職員が気の利いたことを話せないのも気に入らない。彼女が話をするのは、人生に深みのある年配の職員で、特に気が合う人だけ。音楽は好きでピアノも弾くが、カラオケは大嫌い。そもそも団体行動と庶民的なことがイヤなので、他の利用者と一緒にマイクを握りしめて歌うなど死んでも拒否だ。自主独立で、群れない職業婦人である。

男性のBさんは、長年にわたって真面目に会社勤めをしてきた。自分の人生＝会社の生活と言えるくらいに、ほとんどすべての時間をサラリーマン人生につぎ込んできた。認知症になった今では、職員のことを当時の部下だと思い、今月の売上目標を達成するために叱咤激励する。彼にとって老人ホームとは、朝早く出勤し夜遅くまで働いていた会社であり、決して我が家ではない。つまり彼は企業戦士なのだ。

Cさんはサラリーマンの奥さんで主婦だった。活発で外向的な性格で、人付き合いも良いが、主婦業がちょっと不得意だった。洗濯はちょっと嫌い、掃除は普通に嫌い、ご飯を作るのはかなり嫌い。

その一方で、外に出かけるのが大好きだったので、自分で下手な食事を作るよりも近所のお総菜をうまく活用していた。ご主人は食べ物に文句を言わない人だったので、それでも夫婦仲はよく、本人曰く「割と幸せな人生だった」。利用者がそれまで暮らしてきた生活環境は実に豊かで個性的だ。われわれが想像しているほど画一的ではない。

さて、そのような利用者を前にして、「環境を使ったケア」の考え方では、家庭的な環境で長年にわたって生活を送ってきた利用者には、家庭的な環境を整えようという発想が正しい。逆に、家庭的な環境で生活してこなかった利用者、たとえば生涯独身で家庭を持たなかった人や料理が苦手でご飯を作りたくなかった人などには、そもそも家庭的な環境が合っていないので、老人ホームでも家庭的な環境を整えてはいけないという発想が論理的に正しいことになる。

しかし、「環境を使ったケア」を実践している老人ホームの基本的な発想は、家庭的な環境で長年にわたって生活を送ってきた利用者にも、家庭的な環境で生活してこなかった利用者にも、家庭的な環境をお勧めする。というよりも「画一的」、「強制的」に押し付けるのだ。

これは、個室が良いからといって全室個室にして、2人部屋を希望する利用者の「その人なりの生活」を踏みにじっているのと何ら変わらない。

そこには、介護の専門家が良いと判断してやっていることなので、利用者や家族はそれに従っていればいいという、介護する側の傲慢な姿勢が見え隠れしている。

本来、介護の専門職がやるべきことは、すべての利用者に同じ家庭的な環境をあてがうのではなく、家庭的な環境で生きてきた人には家庭的な環境を、家庭的でない環境で生きてきた人には家庭的な環境以外のものを提供することであろう。

くれぐれも惑わされないようにしよう。生活をケアの手段にするというものの、実は、利用者一人ひとりの生活歴をしっかりと見て、それに合わせた介護が展開されているわけではないのだ。「環境を使ったケア」に溺れる傲慢な専門職に未来はない。

岡田耕一郎（おかだ・こういちろう）
東北学院大学経済学部教授。経営組織論。日本、スウェーデン、ドイツの介護サービス組織のマネジメントを研究。

岡田浩子（おかだ・ひろこ）
介護福祉士、社会福祉士。共著として07年に『老人ホームをテストする』を暮しの手帖社から出版。